

## 追悼

## 溝口 正 先生を偲んで

溝口 正先生（学習院大学・名誉教授）が、2014年7月23日慢性呼吸不全のためご逝去されました。享年76歳でした。溝口研究室からは、宮島英紀先生（慶応大・名誉教授）、川越 毅先生（現・大阪教育大）、藤井 純先生（現・トリエステ Elettra シンクロトロン）をはじめ、多くの磁性にかかわる方々が巣立ってこられました。恐縮ながら溝口研究室、最後の助教の山田がお別れの文面を執筆させていただきました。

溝口先生は40年以上にわたり磁性の研究・発展に貢献されてこられました。メスbauer分光によるマグネタイトの研究に始まり、アモルファス磁性薄膜、近年は表面磁性の研究に力を入れてこられました。学習院大学において数百人へのぼる学生の研究指導を行い、現在も多くの卒業生が主として磁気メーカーで活躍しております。日本磁気学会においても初等磁気工学講座を長らく担当され、また2007年には第31回日本磁気学会学術講演会の実行委員長を務められるなど、多大な貢献をなされました。また、生前の功績が讃えられ、正五位・瑞宝中授章の受賞が先日閣議決定されました。

溝口 正先生と私の出会いは、今から約17年前にさかのぼります。当時、学習院大学の学部学生でした。3年生の学生実験を仕切っていたのが溝口先生でした。X線によりいとも簡単に原子構造がわかり、またアーク炉で作った磁性合金の磁化測定から合金内の各原子間の磁気配列や磁気モーメントを探れることが、当時は不思議でありとても面白かったと記憶しております。これがきっかけで溝口研究室に入り、物性や磁性の世界にどっぷり浸ることとなりました。溝口研究室では、毎日のように皆で晩飯を自炊し夜遅くまで実験、翌朝、溝口先生の車の到着音で研究室のベッドから飛び起きるといった日々でした。学生にとって溝口先生は非常に怖い先生でした。学生の曖昧な実験や解析・解釈に対して非常に厳しく叱責されましたが、学生が良い実験データを出したときはその怖い顔が満面の笑みとなったのを記憶しております。学生は、それを楽しみに研究に精を出しておりました。溝口先生は学会においても厳しく鋭い質問をよくされておりました。短気な性格でもあり、しばしば喧嘩をされては後日後悔しておられました。また、溝口先生は教育に非常に熱心な先生でありました。多くの教科書を執筆され「物性物理学」（裳華房）や「磁気と磁性」（培風館）はその代表です。学生実験の授業でも、ユニークな教育用磁性実験装置の開発を進められました。内容の一部は2004年日本磁気学会誌の連載



「Introduction of Basic Magnetism through Experiments」として紹介されました。

活発に磁性の研究を続けてこられた溝口先生ですが退官される頃は辛い日々でした。近角先生から続く伝統ある学習院の磁性の研究室が存続することを望まれたのですが、教授会にて研究室の廃止が決定してしまいました。溝口先生の目の前で、長年苦心して作り上げた装置が重機によりベチャンコにつぶされ廃棄されました。当時の先生の苦痛は耐えがたいものでした。

溝口先生は登山部、スキー部、航空部に所属され山を心から愛されました。研究室のゼミ合宿は常に山小屋でした。「人と同じことはやらない」方針から登山ルートは常に道なき道でした。冬山ではリフトで行ける所まで登り、そこからスキーを肩に担いで頂上まで登り山林をスキーで滑ってくるというすさまじい合宿でした。生きるか死ぬかの自然の厳しさを肌で感じた学生は多かったと思います。自然と平和と学問を心から愛する先生でした。

70歳で退官後も、海外旅行や教科書執筆などお元気に過ごされておりました。ここ1~2年急に連絡がとれなく不安に思っていた矢先、訃報の連絡を受けました。心の中にあった大きな存在がふっと消えたような感覚で、いまだに戸惑っております。溝口先生のご冥福を祈ります。OBや関係者主催のお別れの会を、2014年11月22日土曜日15~17時に学習院大学（目白）学食1階の西館にてささやかに執り行う予定です（詳細は山田までお問い合わせください）。

2014年8月 山田豊和  
（千葉大学 E-mail: toyoyamada@faculty.chiba-u.jp）